

魔法少年ブルーラビットことハルカは、巷で人気の魔法少女だ。ハルカは怪人を倒すために今日も出撃していた。

「怪人達！ 大人しく降服しろ！ ボクが来たからには好き勝手はさせないぞ！」

「また来たか、お邪魔虫め！」

怪人達は、今まででさんざんハルカの怪力に悩まされてきたが、今日はどうやら様子が違うらしい。

「馬鹿め！ これでも喰らえ！」



鞭のようにしなる触手がハルカの手を封じ、ハルカは武器を取り落としてしまう。  
「くっ！ しまった……！」

ハルカはとっさに怪力で抜け出そうとしたが、触手はびくともしない。  
『無駄だ。対魔法少女用の強力な触手からは、何人たりとも抜け出せんぞ！』



怪人は高らかに笑い、新たな触手を構える。

『お前には手を焼かされたが、この触手で、お前も俺達怪人の奴隷にしてやるぜ！』

怪人の手を離れた触手はハルカに触れたかと思うと、そのまま身体を侵食し始めた。  
「なっ……!」  
ハルカの身体はあっという間に重くなり、自由が利かなくなる。  
「なんだヨイツッ!」

『フン、驚いたか? こいつは、身体の中からお前を支配する触手なのだ。  
この触手に侵食された以上、お前は絶対に俺達の命令には逆らえないぜ!』



怪人が得意げに講釈を垂れている間にも、触手はハルカの全身に広がり、ハルカは指一本ですら自分の意志では動かせなくなってしまう。  
『いくらお前が怪力でも、身体の内側を支配されては力を発揮できないようだな』  
そしてそれどころか、ハルカの股間まで勃起し、意志とは無関係に勝手に震えていた。



『おやおや、ブルーラビット。貴様、男だったのか。可愛い顔をして、世間を欺いていた  
と言っわけだな』

『うっ……うるさいっ！ お前達には……関係ないだろっ！』  
『フフフツ、ご主人様に対する口の利き方がなっていないようだ』

『お前の身体はもはや我々の命令一つでどうにでもなるのだ。身をもって知るがいい』  
『ほら、街中でイッてみせろ、ブルーラビット!』  
『なっ、そっ、そんな……ひっ♡ おおおっ♡』



ハルカが驚く中、ハルカのち○ぽは勝手に射精し、スーツの中に精液を漏らした。

『あああっ♡ やめっ、止めさせろおっ♡ あっ、イクううっ♡』

『ははは、無様な姿だな、ブルーラビット。そうだ、貴様を我々のペットにしてやろう。』

怪人ち○ぽ無しでは生きられない、従順でド淫乱なバニーちゃんとしてなw』

怪人はまだイキ続けているハルカを引っ立て、アジトへと帰還した。

『そこに手を突いて大人しく待っている』  
そう命令されると、ハルカの身体は一も二もなくその言葉に従い、  
警備ががら空きなのに逃げることも出来ない。

『くそっ！ こんな…こんな触手なんて…っ！』  
ハルカは意志の力で必死に手足を  
動かそうとするが、意味を成さなかった。

プルッ

うっ

そうこうしている間に、怪人がまた戻ってくる。

『よしよし、いい子だな、ブルーラビット。クククッ、ご主人様が可愛がってやろう』



『スベスベの女みたい肌だな。たまらねえぜ』  
怪人は、勃起した自分のいちもつをハルカのまたの間に挟み、太腿の柔らかく  
すべすべした感触を楽しんでいる。

「あっ！ やっ・やめるっ！ 気色悪いもの近付けるなよっ！」

ハルカは悪態を吐きながらも、

怪人に擦られていている部分が気持ちよくて

ガッ

仕方がない。

「んん？ どうした？ 腰が動いているぞ。

まさか、こんなもので気持ちよくなったなんて

言わないだらうかな？」

「うっ……」

怪人はわざとハルカを

辱めるが、実はハルカの

身体を支配している触手が

感度を上げ、快感を数十倍にも

高めているのだ。

『しかし、気持ちよくない

と言っなら、可哀想だからなあ』

あ……

ズリ  
ズリ

怪人はハルカのパンツ部分を剥ぎ取り、直に玉袋に怪人ち○ぽを擦り付ける。

「くっ♡♡♡ そっ、そんなんっ♡♡♡」

（気持ちいいっ♡♡♡ だめだっ♡♡♡ こんなもの♡♡♡ ボク♡♡♡っ♡♡♡）

ハルカは必死に快感を堪えたが、やがて射精してしまう。

「くっ♡♡♡ ひうっ♡♡♡」

『なんだ、気持ちよくないんじやなかったのか？』

素股でイクなんて、女以下の変態だな』

「だっ、黙っ♡♡♡ あうっ♡♡♡」

うっ、動くなっ♡♡♡

やめっ♡♡♡ ひっ♡♡♡」

『おいおい、股を締め付けてるくせによく言うぜ。』

しかし、精液で滑りが良くなっ♡♡♡

なって最高じゃねえか』

くっ♡♡♡

んっ♡♡♡



『もうイッちまいそうだぜ！ うおおっ！』  
怪人は素股のまま射精し、更に腰を動かし続ける。

「んおっ♡ おおっ♡ いゝ嫌だあっ♡」

ハルカは股でビクビク暴れる怪人ち○ぽに刺激され、あっけなく射精した。

『だらしねえ身体だな。おら、どうだ？』

『それでも気持ちよくないってのかよ？』

「あっ♡ あひっ♡ やめるおっ♡」

はっ♡ はっ♡ あああっ♡」

ハルカは、イキながらも必死に身体を動かそうと試みるが、快感のせいで集中すら出来ない状況で、それが叶うはずもない。



「ひあああああっ♡」

やがてハルカは大量の潮を吹き、ガクガクと痙攣した。

「こんなのおかしいよおっ！ 何でボクっ！ こんなあっ！」

「とっ、止めるっ♡ やめろよおおっ♡」

『自分の立場が分かったか？』

お前はもう俺達の敵じゃねえ。

ペットなんだよ！

大人しく服従しないと、いくらでも辛い目に

遭わせてやる事が出来るんだからな』

「くそおっ♡ だれがっ♡」

お前達なんかにいっ♡」

悲鳴と嬌声の入り交じった声で、

ハルカは必死に怪人を

罵り、反抗し続けた。

ひあああ♡

ガク♡

ガク♡

ガク♡

ガク♡

ドブドブ  
ジュルジュル

ガク♡



この敵アジトに囚われてからというものの、ハルカは警備も無しに放置されている。しかし、逃げようにも、身体は鉛が入ったように重く、意志の力では動かせない。それなのに、怪人が命令したときだけは、意志とは無関係に命令に従ってしまうのだ。



『ああ、ここにいたのか、ブルーラビット』

怪人は、思い出したようにハルカを見つけては、屈辱的な事をさせてハルカを辱める。

『ご主人様に挨拶しろ。おねだりポーズだ』

「ふっ、ふざけるな！ どうしてボクがそんな……っ」

口では嫌がりながらも、ハルカの手はゆっくりと持ち上がり、仔犬のように胸の前でちんちんをする格好になる。

「ううう……っ！」

（こっ、こんなポーズ……っ！ ぼ、ボクは魔法少女なのに……っ！）

『良い子だな。さあ、次は何が欲しいか口で言ってみる』



ううう……

ブル

ブル

ブル

羞恥で真っ赤になるハルカを満足そうに眺め、怪人は更に命令した。

「なっ……ぐ……く……っ！」「……」「じゅじんさまの……おち○ぽ、……ほじいてす……っ」

思ってもいない言葉が口を突いて出て、ハルカは一層顔を赤くした。触手達は、

いつもはハルカの口を自由にさせているが、怪人が命令したときだけは、

どんな卑猥な言葉も吐かせることが出来るのだ。

『ほお？』じやあ、望み通り、俺達のち○ぽで遊ばせてやるか』  
怪人はニヤニヤとハルカの顔の前にち○ぽを突き出し、手コキをさせる。  
『くっ、クソッ！』こんな汚いものっ！』触りたくなんて……お……覚えてるよっ！』  
ハルカは涙目になりながらも、必死に手でち○ぽを愛撫した。

生臭い臭いに吐きそうになりながらも、ハルカは自分の手を止められない。

『可愛い奴だぜ。顔に精液をぶっかけて欲しいようだな』

『ひっ……やっ、やめるよっ！』そんな事望んでな……』

『おら、ほっぴだぜ！』



ピュツと生臭い精液がかかると、ハルカの顔が嫌悪に歪んだ。

「きつ、気持ち悪いっ！ くううっ！」

『何だど？ 精液をかけてもらったら、ありがどう』『さいますだるうが。言ってみる』  
『だっ、誰が礼なんか…言…っ！』



はねつけようとするハルカだったが、またしても口が勝手に動き、言葉を発してしまふ。

「せ、精液をかけていただいて…あ…ありがどう…ございます…っ♡」

（いっ、嫌だっ！ こんなこと…言いたくないのにっ！）

しかも、それだけではなく、この生臭い精液の臭いに反応して、股間がヒクヒクうずき始めたのだ。

『フフツ、口ではいくら反抗しても、身体は精液を欲しがっているようだな』  
『そんなに興奮しているなら、勝手にイクがいい』  
怪人に射精の許可を出されると、ち○ぽの内側を擦られるような刺激が走り、  
ち○ぽから勝手に精液が噴き出した。

「あっ♡ あっ♡ ああっ♡」  
ハルカはびくびく震えながら、衝撃に顔を緩ませる。  
(さ、触ってもないのにつ!! い、イッてるっ!!) し、しかも……まだち○ぽが  
グリグリされてるよおっ!!



あっ♡

フフツ

ピョルル♡

「んひいっ♡」  
ピューピューと潮を吹き続けながら、ハルカは必死に手を動かし続けている。  
怪人はハルカの哀れな表情に興奮し、更に精液をぶちまけた。

『そんなに精液が欲しいのか？ この淫売が』  
「違っ♡♡♡ ああ♡♡♡ もっ、もうやめるよおっ♡」  
ハルカは無様に腰をカクカク振りながら、全身精液まみれになっても、  
怪人に奉仕を続けたのだった。



ハルカがあくまで意地を張るので、怪人はハルカの身体を更に  
舐めていくことにした。しかし、すでにハルカの身体は感度も  
良く、命令通りに動いてしまう。そこで、怪人はハルカに射精  
我慢をさせようと考えた。

♪...♪

『今から、お前のち○ぽは俺達が  
許可を出すまで射精できない』  
『俺達に服従する気になったら  
イかせてやるから、いつでもそう言いな  
『だっ、誰がそんな事言っかつ！』  
ハルカは、敵の前で射精など、しないなら  
その方がずっと良いと信じている。



『まあ、その我慢がいつまで続くか、実際に試してみるとしよう』  
怪人は余裕の笑みで、ハルカに近付き、ハルカの乳首やち○ぽを愛撫する。  
『いっ……♡』

ハルカは太腿を強く握りしめ、襲ってくる快感に堪えた。  
『ほお、頑張るな。』  
『これでも、感度は数十倍に上がっているはずだが』  
『だったら、もっと気持ちよくしてやるとしようか』  
怪人はパチンと指を鳴らし、感度を数百倍に高めるよう、内側の触手に命令する。



「はっ♡ はあぁっ♡」  
プシッ♡ とハルカのち○ぽからカウパーが噴き出し、  
ハルカは目に涙を浮かべて震えた。  
「はっ♡ ひっ♡ あぁっ♡」

「おやおや、お漏らしか？」  
「情けない声が出ているぞ」  
もうイキたくてたまらないんだらう？」  
「だっ、黙れえっ♡♡♡ イッ、イキたく♡♡♡  
なんてえっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡」  
ち○ぽの根元を内側からきつく縛められて、  
ハルカは絶頂付近の快感を与えられつつ、イクことができない。



『しぶとい奴だな。なら、「この触手も試してやるか』  
怪人の一人が吸引触手をハルカのち○ぽに吸い付け、  
出ない精液を無理矢理吸い出そうとち○ぽを刺激する。  
「フーツ♡フーツ♡フーツ♡」

ハルカは歯を食いしばり、  
哀れな顔で必死に快感を  
押し殺した。

射精して楽になりたいが、  
敵の前でそんな無様な真似をしたくもない。  
そもそも、どれだけ気持ちよくても  
もどかしくても、体内の触手が  
それを許してくれないのだ。  
『いい表情だぜ。先走りでち○ぽ  
ドロドロにしてエロいガキだ』



『おら、おねだりしてみる。楽になるぞ?』  
『いやだっ♡ だれがっ♡ お前達なんかにいっ♡』  
ハルカはなかなか懇願しようと思わず、怪人は長いことハルカを弄って弄んだ。しかし、やがてち○ぽの根元を押さえていた触手が緩み、ハルカは勝手に射精してしまう。

ハルカのち○ぽから精液が大量に噴き出し、吸引触手からも溢れた。

『ひゃああああっ♡』

『あゝあ、イッチまった』

『こいつとんだけち○ぽ』

ガチガチにしてたんだ?』

吐き捨てるように罵られながらも、

ハルカは射精を押さえられない。

（イカされてるっ♡ みっ、見られてるっ♡

こんな奴らの前でイッてるうっ♡）

ハルカは長い間精液を噴き出し続け、屈辱とそれを上回る快感に泣きじゃくったのだった。

ハルカは長い間精液を噴き出し続け、屈辱とそれを上回る快感に泣きじゃくったのだった。

ハルカは、身体の感度が数百倍に高められたとはいえ、アナルの拡張など、奴隷としての基本的な肉体改造が完了しておらず、怪人達は、快樂調教も兼ねて身体を開発していくことにした。

『まったく、見た目に寄らず、手を焼かせる奴だぜ』  
怪人はハルカを床に転がし、動かないよう命令する。

『さあで、処女ケツま〇〇を可愛がってやるとするか』  
『ど…ど…ど…を…だどど…』

ハルカは、自分が聞いた言葉が信じられず、思わず聞き返す。  
（こ…こいつら…まさか…っ！ そんなわけ…っ！）



『おら、挿れるぞ』  
怪人は無造作にアナルに指を突っ込み、前立腺を探して指でアナルをかき回す。

『ひいっ♡ あぐっ♡ やっ、やめるっ♡ きっ、汚いだろっ』  
『うるせえな。生意気な口をきくんじゃねえよ。』

『おねだりの一つでも言ってみな』  
『うぐっ!』

ハルカは、途端に声が出なくなり、そしてまた勝手に媚びるような台詞が口を突いて出た。

『もっ、もっとケツま〇に弄ってくださいっ♡』『主人様あ♡』  
『よしよし、じゃあ指を増やしてやろうな』  
怪人は得意になって、両手でアナルを弄り始める。



グチユグチヤと前立腺を突きまわされて、ハルカはあっさりトコロテンしてしまった。

「はひっ♡ あっ♡ んっ♡」

『気持ち良さそうな顔しやがって。ガキのくせにもうケツイキを覚えたのか？ 根っからの変態だな』

怪人はハルカをあざ笑いながら、更に奥まで指を突っ込む。

「やっ、ひやめるおっ♡  
ぬっ、抜けよおっ♡」

はひっ♡

ハルカはビクビク身体を震わせながら反抗するが、怪人は薄く笑うだけだ。



んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

びっ

びっ

あっ♡  
んっ♡

びっ

びっ

『お、ここか？ ここがいいんだな？』  
怪人は前立腺の裏側に指を強引にねじ込み、前から後ろから、  
前立腺をごね回す。

「おほおおっ♡ おおおんっ♡」  
ハル力は腰をカクカク振り、泣きじゃくって、  
終わらない絶頂に悲鳴を上げた。  
『ご主人様にお礼を  
言うんだ』



「あっ、ありがとうございませうっ♡♡ ご主人しやまあっ♡♡」  
くそおおっ！ ボクはこんな事っ、思ってないのにっ！

ハルカが内心屈辱に震えている間にも、怪人は極太の触手をハルカのアナルに挿入し、腰を上げる。  
『よしよし、後はこの触手に可愛がってもらえ。こいつを簡単に飲み込めるようになれば、どんなち○ぽも入るようになる』

触手は、白濁した媚薬入りの潤滑液を流し込みながら、  
どんどん奥へと入り込んできた。

「あぎいいっ♡ あゝっ♡  
抜いてっ♡ 抜けよおおっ♡」

ハルカは触手のせいで潮を吹き続けながら、怪人に放置されて  
何時間もイカされつづけたのだった。



ハルカは、これだけされても、まだ服従しようとはしなかった。これでは、いくら触手で身体を支配し言動を命令通りに変えられても、真の勝利にはならない、と、怪人達は躍起になって調教を続けている。『強情なお前には、持久戦が必要なようだな』  
怪人はハルカを跪かせると、ハルカの股間に機械を装着する。



『俺達が遠征に出ている間、この玩具達で遊んでいるんだな』  
怪人は触手を呼び寄せ、乳首を弄らせると同時に、機械でハルカのち○ぽを  
吸わせ始めた。

「はうっ♡ あっ♡」

ハルカの感度を上げられた身体はあっという間に反応し、乳首の刺激だけで  
機械の中に射精してしまう。



ピュッ♡

「あひっ♡ はひっ♡」

ハルカはびくびく震え、拳を握りしめた。

「くっ……こっ、こんなこと……っ！ む、無駄だからいな……っ！」

「射精しながらよく言っぜ。だったら、他の触手も置いていってやる。

俺達が帰るまで、触手達と仲良くやるんだな」

「ひっ……！」

怪人は触手をけしかけ、そのまま出かけていってしまった。

あひっ♡

んっ♡

んっ♡

ピュッ♡

びっ♡

はひっ♡

んっ♡

んっ♡





1時間、2時間、3時間が経っても、触手達はまだハルカの口には新たな触手が入り込み、  
口からもアナルからも、  
精液を作り出す素となる  
粘液を流し込み、  
ハルカを休ませない。

「んぐううううっ♡」  
（死ぬうっ！）

死んじやうっ！  
早く帰ってきてよおっ！

ハルカがいくら怪人の帰りを願っても、帰ってくるのは3日も後のことなのだった。



ハルカの身体は徐々に開発され、ただ感度が高いだけでなく、与えられる快感に逆らうことが難しくなり始めていた。  
ハルカが心でいくら逆らおうと、否応無しに射精してしまうのみならず、自ら腰を振っておねだりし、怪人を喜ばせてしまうのだ。

くぱっ♡

あ...

（ぼ、ボクは……こんなこと望んでない……!!  
あんな卑怯な奴らに……気持ち悪いことされて、嬉しいなんて思うはずがない!）

ハルカがそう自分に言い聞かせていても、怪人のち○ぽの臭気を嗅いただけで、ハルカのち○ぽは現金にヒクヒク震え、期待に先走りを垂らしてしまう。  
「くそっ! やめろっ! もうやめろよっ! こんなことっ!」  
ハルカは、身体の反応を認めたくなくて、必死に怪人を罵った。

『素直におねだりすれば、可愛げもあるんだがな。しょうがない奴だ』  
怪人は構わずち○ぽをハルカのアナルに突っ込み、突き上げ始めた。

んっ♡

ブルっ♡

「おっ♡ おっ♡ おおっ♡」  
ハルカは嬌声を上げ、それだけでトロロテンしてしまう。  
『もうイッたのか？ 情けない奴だな。だが、まだまだ始まったばかりだぞ』  
怪人は激しく腰を打ち付け、さらにハルカを鳴かせた。  
『ほお。可愛い声で鳴くようになったな。俺も混ぜろよ』

他の怪人もやってきて、更にハルカを叫ばせようと、ち○ぽを同時に扱き始める。



「ふああああっ♡ やめっ♡ いつ、今っ♡ あひっ♡ あっ♡ あはっ♡」  
ハルカはぎよっとし、慌てて身をよじる。  
しかし、当然抜け出せるはずもなく、イッたばかりの  
ち〇ぽを弄ばれ、泣きじやくった。  
『こいつ、どんどんエロくなりやがるな。  
だめだ、もうイキそうだぜ！』  
怪人は興奮し、ハルカのアナルに大量に  
精液を吐き出した。



ヤッ

ふああああっ♡

ヤッ

グッ

グッ

グッ

ヤッ

グッ

グッ

フチュ  
フチュ

あはっ♡

ドブチユルルツ♡

「んほおおおっ♡」

ハルカは獣のように絶叫し、自らも潮を噴き上げる。

怪人達はまだ動きを止めず、そのままハルカを責め立て続けた。

「やめろおおっ♡ もういいだろおおっ♡ やめてくれええっ♡」

ハルカは失神するまでイカされ続け、怪人を楽しませたのだった。

ビュルルツ♡

ガク♡

ドブチユルルツ♡

ガク♡

んほおおおっ♡

ガク♡

ガク♡



ハルカは徐々に追い詰められていた。怪人達の責めは予想以上に激しく、執拗だった。  
『いい加減素直になれ。服従すれば、酷い遊びはしないぜ?』  
『くぅ……お、お前達の言うことなんて信用するか!』  
ボクは絶対に服従なんてしない!』

くぅ……

『身体を支配されてもなお、  
それだけの啖呵が切れるとはな。  
お前の強情さには感心するぜ』  
怪人は面白がり、ハルカに歩み寄る。

『だが、そうやって怪人を憎んでいる魔法少女共を犯すのも、  
それはそれで楽しいものだがなあ』  
怪人はハルカに覆い被さり、遠慮なくち○ぽを突っ込んだ。

「はうっ♡」  
ハルカは深くち○ぽを突き入れられ、軽く射精した。  
怪人はもったいぶるようにゆっくりと抜き差しをして、ハルカを見下ろす。

はうっ♡

ズン♡

ずい。

ズン♡

『どうした？ もどかしそうだな？ もっと激しくやって欲しいのか？』

「ち…違…っ」

『だめだ。ちゃんとおねだりしろ。命令だ』

「ううう…っ！」

ハルカは歯を食いしばったが、命令を受けると逆らえない。

フッ

「もっ……もつと激しく……ケツまのこ犯してください……主人様……♡」  
ハルカの口を突いて出た  
卑猥な言葉に、  
怪人は満足げに笑った。

怪人は激しく腰を動かし、ハルカを犯し始める。

「くひっ♡ くうっ♡ ひっ♡」

ハルカは顔を緩ませ、怪人の背中に腕まで回して快感を得ようと腰を振る。

「ほっ、ボクじゃないっ！ ボクはこんなことっ！ するわけないっ！」

ハルカは必死に言い訳をしていたが、怪人がアナルに中出しすると、  
あられもない顔で嬌声を  
上げる。

ギッ♡

ギッ♡

フッ♡  
フッ♡  
フッ♡

フル

フル

♡♡♡  
♡♡♡  
♡♡♡

ブチユチユツ♡

「おおっ♡ おっ♡

おおおんっ♡」

おおっ♡

カッ

カッ

カッ

おおっ♡

（すっっっ…ああっ♡ こんなあっ♡）

しがみついて腰を振るハルカに、

怪人は薄い笑みを浮かべた。

『なんて顔しやがる。お前は根っからの

淫売だな。怪人ち○ぽに中出しキメられて

嬉しそうにヒイヒイ鳴きやがってよ』

侮辱され、罵られても、

ハルカは動きを止められない。

カッ

ズッ

パン

パン





ハルカは、身体が自分のものではなくなくなったような危機感を覚え、  
焦燥に駆られていた。

（ボクは……ボクの身体は……  
あんなやつらに玩具にされて……  
で、でも、心まで売り渡したりは  
しない……っ！）  
しかし、いったん責めが始まると、  
ハルカの意志の力ではどうする  
事もできないのだ。



『何不機嫌そうな顔してやがるんだ？  
ほら、ご主人様におねだりはどうした』  
ハルカは羞恥と屈辱に震えながら、  
尻をつかんで笑顔をさせる。ネ  
ご主人様……今日も  
変態オナペットのケツま○こを  
可愛がってください……♡』  
台詞を言っつて、尻をクネクネと  
ふり、ハルカは涙目になった。



（ぼっ、ボクは変態なんかじゃない……こんなの……ボクじゃない……っ！）  
怪人はハルカの哀れな表情を見下ろし、ハルカのアナルにち○ぽを突っ込んだ。

『おねだりが上手くなっただな、ブルーラビット。いや、もうかわいいバニーちゃんか？』  
「くううっ！」

歯噛みするハルカだったが、  
アナルを突かれた途端、  
その表情が甘くなる。

「あっ♡ おっ♡

ひあっ♡ ああっ♡」

『可愛い声で鳴きやがる。

が、おねだりを忘れてるぜ』

「うっ♡は、はいっ♡」

ズッ♡

ズッ♡

ヒッ♡

ヒッ♡

ヒッ♡

あっ♡おっ♡

「へ…変態ペットのケツま〇に…か、怪人様の精液を恵んでくださいっ♡」



『しようがねえな』  
怪人はニヤニヤ笑い、アナルの中に精液を中出しする。

「ふあああああ♡♡♡」

ハルカは腰を振りながら、  
嬉しそうにアナルを  
締め付けた。

『どうだ、もっと欲しいだろ?』

怪人は腰を振りながら  
ハルカに尋ねる。

「ほいいっ♡♡♡」

グチュ♡♡♡

パン♡♡♡

パン♡♡♡

カッ♡♡♡

カッ♡♡♡

ハルカが息も絶え絶えに答えると、怪人は更に激しく腰を打ち付け、責め立てた。



『おらおら、望み通り犯してやってんだから、感謝しろよ!』

「んおっ♡ おおっ♡ おおんっ♡」

ハルカは舌を突きだし、惨めに喘ぐ。

(はっ、激しっ♡ ああっ♡ 苦しっ♡)

もっ、もう止めてくれえっ♡)

ハルカは突き上げられる度に

ガクガクと揺れながら、

ち○ぽから潮を吹き続ける。

『物欲しそうに締め付けやがって。

イキそうだ。中に出してやる!』



ドブチュチュツ♡ と中出しされて、ハルカも激しく潮を吹いた。

「ひぎいいいいっ♡ あああっ♡」

ガクガクと突っ伏して喘ぐハルカを眺めていた別の怪人は、堪えきれなくなったようにハルカに歩み寄り、口にち○ぽを突っ込む。

『うるせえ口だな。ち○ぽでも啜えてるよ。おら、今度は口を犯してやる』

その様子を見ていた他の怪人達も次々と加わり、あっという間に1対多数の対乱交状態になっていく。

興奮した怪人に口を犯され、アナルもまだ犯され続けながら、ハルカは終わりのない快楽地獄で、ひたすら強制的に怪人達に奉仕をさせられたのだった。



ハルカは、さんざん肉体を弄ばれ、毎日のように快樂地獄を味わわされても、まだ服従はしていなかった。しかし、もはや怪人に逆らえる身体ではなくなり、快樂を与えられれば、否応なくそれに応じるように調教されている。『お前はまだ自分の立場を受け入れないつもりだろうが、身体はもうすっかり奴隷のものになっているようだ。そこで、お前に相應しいコスチュームを着せてやるわ』

「うっ……」

（ニ、コスチューム……？）

ハルカがいぶかしんでいる間にも、

怪人はハルカに奇妙な服を着せた。



うっ……

それは、大事なところは何も隠れていないバニーの衣装だった。  
『身分をわきまさえさせるには、まず形からというわけだな』  
怪人はハルカの格好を見て笑い、ハルカは顔を赤らめる。

『こっ、こんな馬鹿みたいな恰好……っ！ぬっ、脱がせるっ！  
こんなもの着てられるかっ！』

『フン。とかなんとか言っているくせに、  
ち○ぽは嬉しそうにヒクついているぞ』

『う……ちっ、違っ！これは……』

ハルカの身体の触手達は、  
今やハルカの羞恥や屈辱を感じ取り、  
それを肉体的な興奮に  
変えてしまうようになっていた。

『恥ずかしい格好で興奮するとは。  
変態魔法少女には相応しい衣装だな』  
『くっ、くそおっ！脱いでやるっ！  
こんなものっ！』  
ハルカは身をよじろうとしたが、  
身体はビクとも動かず、  
完全に触手に乗っ取られている。  
その間にも怪人はハルカの股の間に座り、ち○ぽをねじ込んだ。



「ひああっ♡だめっ♡だめだあっ♡」  
ち○ぽが挿入されただけでハルカはあっけなく射精し、  
涙を浮かべて喘いだ。  
「まったく、  
エロい身体だぜ。  
命令しなくても  
ずいぶん甘い声が  
出るようになったな」

怪人は満足げに笑いながら、  
パンパンと激しく腰を打ち付ける。  
「おっ♡おっ♡やめっ♡ひっ♡」  
ハルカはしどけない嬌声を上げ、  
知らず知らずの内にアナルを締め付けた。んちあっ♡



ブチユルルツ♥ と怪人が中出しすると、ハルカの顔が  
哀れに緩む。  
「んはあああ♡」  
ビクビクと余韻に震え、  
アナルをくぱくぱ淫らに  
うごめかすハルカを、  
怪人は嘲笑した。

『こんなみじめな状態で、  
どうやって意地を張れるんだ？  
お前、もっと虐めてほしくて  
逆らってるんじゃないだろうな』  
怪人は侮蔑しながらさらに  
腰を打ち付け、快感を貪った。

んはあああ♡



『おら、従順になれるよう、もっと気持ちよくしてやるぜ！』  
ドブシユウウツ♥ と怪人は二度目の中出しをして、

「ひいあああ〜っ♡」

ハルカは嬉しそうに絶叫し、ガクガクと痙攣した。

ち○ぽは馬鹿になったように潮を垂れ流し続け、

ハルカは長い長い絶頂を味わわされている。

『こんな気持ちいいこと、

人間の世界じゃ味わえねえ。

俺たちに服従する方が、幸せだろう？』

ハルカは返事をする  
余裕もなく、意識も半ば飛んでいたが、  
怪人は笑いながらハルカを犯し  
続けたのだった。

「ひいあああ〜っ♡」



ハルカに逆らう能力が完全になくなったとみて、怪人はとうとうハルカを街に連れ出した。ハルカはまだ従順にはなっていないが、町での調教がハルカにとって有効であることは、怪人達にもよくわかっていた。

『おいブルーラビット。人間たちにお前の奴隷クリち○ぽを見せつけてやれ』  
怪人が命令すると、ハルカの身体は勝手に無様なポーズを取り、カクカクと腰を振って見せる。

（うっ、嘘だっ！ ボクっ…ひ、人前で…っ！）

ハルカは涙目になり、羞恥に震えた。しかし、触手がそれを興奮に変換し、ハルカのち○ぽは一層ガチガチに硬くなり、存在を主張する。

『おい…あれ…ブルーラビットだよな…！』

人々は、突然の変態ショーに驚き集まってきて、見物し始めた。

『さあ、皆に見てもらえ。お前の調教の成果をな』

怪人はハルカを抱え、アナルに怪人ち○ぽを突っ込んで犯し始める。ハルカはそれだけで射精して、歯を食いしばった。しかし、その表情はあっという間に快感に緩み、はた目にも怪人ち○ぽで悦んでいるように見える。

「あっ、ありがとうございますっ♡ 怪人様あっ♡」

思ってもいないのに、ハルカの口からは感謝の言葉がこぼれ出て、ハルカは屈辱で真っ赤になった。

『うわ……礼言ってるぜ。もう完全に奴隷じゃん。ていうか、男が怪人に犯されて喜んでるってさあ……幻滅なんだけど』

（ちが……ぼ、ボクっ！ そんなこと……思っていない……のにつ！）

街の人々の冷たい反応に背筋がぞくぞくしたが、屈辱や羞恥、背徳感が快感に変換され、ハルカの身体は一層乱れてしまう。



ドブピュツ♥ と怪人が中出しすると、ハルカは完全に快感に翻弄されて、人目を気にする余裕もなく、獣のように喘ぐ。

「おおっ♥ ふあっ♥ そんっ♥ そんなっ♥ ああんっ♥ 激しっ♥」  
『恥ずかしい奴だ。町の人間に見られて興奮しているのか？』

「違っ…あっ♥ あっ♥ なんでえっ♥」

（嫌なのにつ♥ 嫌なのにつ♥ 感じちゃうよおっ♥ 見ないで欲しいのにつ♥）

み、見られたら…気持ちいいなんてえっ♥



ハルカは混乱しながら、大量の潮を吹かされ、のけ反った。  
「ひぎいいいいっ♡ あああっ♡ 止めてええっ♡ こっっ、こんな姿っ♡  
見られたくないよおっ♡ おっ♡ お願いですからあっ♡」  
イキすぎて自分がどれほど情けない顔を晒しているかを  
危惧しながら、ハルカは必死に怪人に懇願した。



『あの顔見ろよ。もう人間終わりだなW もうあんな奴に守ってほしくねえよ』  
『怪人が後始末してくれんじやね?』  
街の人々の非情な言葉を聞きながら、ハルカはさらに激しい絶頂に追い上げられる。

「あひひひひひひんっ♡」  
ブシユシユツ♡と、全身を汚す大量の潮を吹き、またアナルにも精液を注がれて、ハルカは恍惚の表情を浮かべた。街の人々の侮蔑や嘲笑の目を全身に感じるが、もはやそれすらもハルカを昂らせるためのツールでしかない。

世間から見捨てられたハルカには、怪人のもとで哀れな見世物となる以外の道は残されていないのだった。



もはや自分が帰る場所はないのだ、と理解したハルカが服従するまでに、  
長い時間はかからなかった。苦痛を耐えても、得るものなど何もない。むしろ、進んで  
服従すれば、怪人達から可愛いオナペットとして毎日快樂を与えてもらえるのだ。  
「怪人様あ♡早くう♡」

ハルカは、公衆の面前で  
恥じらいもなく股を開き、  
怪人におねだりする。

ハイッ

うふっ



怪人がち○ぽを挿入してやると、ハルカはあっけなくトコロテンして、全身を震わせた。

「ひんっ♡ 怪人様あっ♡ おち○ぽおっきい♡  
ハルカあ、すぐにイッちやいますう♡」

「よしよし、素直でいい子だな。」

「かわいいペットには、ご褒美をやるう」  
鼻にかかった声で媚びるハルカを、  
怪人は容赦なく犯し始めた。

ズ

チュ♡♡

パン

パン

ひんっ♡

ひんっ♡

んっ♡

『うわ、ブルーラビットすげえエロいんだけど』  
『ちっちゃくて可愛いし、俺男の娘でもいい！』  
『怪人いいよなあ！俺も犯したい！』  
街の人々は、従順に怪人に奉仕するハルカを、  
むしる羨ましそうに眺めている。

『ほら、お前の好きな乳首だぞ。気持ちいだろう』

「あひっ♡ あっ♡ あっ♡ いいっ♡ 気持ちいいですうっ♡」

ハルカは自ら腰を振り、嬉しそうに喘ぐ。

一度は自分を見捨てた人間たちが、今は自分の

痴態を見て興奮し、憧れている。

怪人も、ハルカの淫らな姿を喜んでくれる。

男の目を楽しませる無様な変態であることが

自分の価値なのだ、と、ハルカの意識は

変換されていた。

フホ♡  
フパ♡  
ブパ♡

ブル♡  
ブル♡

ヒッ♡

ヒッ♡

クリ♡  
クリ♡

ヒッ♡

ブル♡

あっ♡

はっ♡  
あっ♡

『ああんっ♡ご主人様あっ♡ハルカっ、  
もうイキますうっ♡イカせてくださいっ♡』  
『俺も種付けしてやるぜ』

ドブピュツ♥と種付けされる瞬間、見とれていた人々は、思い出したようにスマホのシャッターを切る。

「んほおおおっ♥」

ハルカは、写真にとられていることを意識しながらも、一層興奮して潮を吹いた。

「あっ♥ あっ♥ きもちいいっ♥」

ハルカは、更に貪るように腰を動かし続ける。

腰を動かし続ける。



「ああんっ♥ もっとおっ♥ もっと  
気持ちよくしてくださいっ♥ ご主人様あっ♥」  
ハルカの痴態につられ、怪人のペースも上がる。

「んほおおおっ♥」

ヤッパ

ヤッパ

ドブピュツ

ドブピュツ

ドブピュツ

ドブピュツ

ドブピュツ

ブピュルルツ♥ と、やがて大量の精液が中出しされると、ハルカは絶叫して、泣きじゃくった。

「あがああああつ♥ ひやあああああつ♥ お腹熱いよおおつ♥ 死んじやうつ♥ きもちいいいいうっ♥」

ハルカは怪人が与えるこの快楽を心から悦んでいた。

これこそがハルカの存在価値であり、怪人の性欲を満たすためだけに存在しているのだ。

魔法少女ブルーラビットは、オナペットとしての自分の立場を受け入れ、性奴隷に堕ちたのだった。

